

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(四)

高山, 倫明

九州大学大学院人文科学研究院文学部門国語学・国文学講座 : 助教授 : 日本語学

<https://doi.org/10.15017/1175>

出版情報 : 文學研究. 98, pp.105-121, 2001-03-30. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン :
権利関係 :

翁広平『吾妻鏡補』所載日本語史資料試解(四)

高山倫明

本誌九七輯の前稿につづき、清代の日本研究書『吾妻鏡補』(翁広平著、嘉慶十九・一八一四年序)の「国語解」に引用された「海外奇談」の読解を試みる。今回は「禽獸蟲魚類」「花木類」である。凡例・文献等は前稿を参照していただきたい。

五、試解(承前)

禽獸蟲魚類

0302 「鳥」秃力(とり) A…トリ B…トリ

0303 「蛋」太麦古(たまご) A…タマゴ B…タマゴ 《駒上…太…大》

見出し語はタマゴ。『南山考講記』^{キイダシ}「雞蛋」ニハトリノタマゴ」等。なお「卵」字は日中で基本義が異なり、本書には0162「卵馬蘭」(まら)、0163「卵袋 今搭姆」(きんたま)の例が見える。『雅俗漢語訳解』には「卵 陰莖を云ふ」とある。駒沢大学図書館本と上海図書館本は音注の一字目が「大」字になっているが、0189「大便 大便一過」(だいべんいく)、0893「不

做聲 大麦多里」(だまつとれ)のような例からすると「太」字が適当であろう。0311「龍 太子」(たつ)、0420「竹 太吉」(たけ)、0467「烟 太白戈」(たばこ)等々。

0304 「鳳」付翁(ふうおう?) A..ホオウ B..ホオウ

鳳凰(ホウワウ)に該当するのは間違いないが、校本A Bのような「ホオウ」といった語形があったかどうかは不明。吉原遊郭で大夫職の異名に鳳凰があり(鳳凰の価は桐が三つなり・柳多留)、それはホウオのような語形であったらしい(ほうをのべ、を引張たと思つて・浮世風呂)。いずれにせよ音注「付」字はホ・ホウのような音には合わず、0678「笛付葉」(ふえ)、0734「除包 付達非古」(ふうたいひく)等のようにフ・フウにこそ相応しい。肥前では一般に合音はウ段長音化するので「ホウワウ」は「フーオー」になるのが順当で、ここはそういった語形を写した可能性が高いが、確例が見出せない。なお音注「翁」字には0471「雄黄 烏翁」(うおう)、0976「重 翁婆夾」(おぶか)等の例がある。

0305 「鶴」子羅(つる) A..ツル B..ツル

0306 「鷹」俺(がん) A..ガン B..ガン 《駒上..俺<儉》

音注「俺」字は他に例がない。同じく孤例だが「掩」字には0403「剪秋羅 掩皮」(がんび)の例がある。いずれも影母であるが、ともに「がん」と解してよさそうに見える。『漢語方音字匯』で、類音字「淹」の長沙方言・南昌方言の白話にpanの音が見えているのが注意される。

0307 「鷹」秃皮(とび) A..トビ、鳶と誤るか B..トビ 《駒上..秃<委》

0308 「鵝」額(が) A..ガ B..ガ

音注「額」字は、他には0369「枝 額手」(■)、1026「彎 麦格六以額」(まがる・いがむ)のみだが、『南山考講記』に「鵝ゴウニヤ・ウ鳥 ガ」、本山桂川『長崎方言集』に「ガ― 鷺鳥(童謡)「ガ―ノ クビヤ ヨゴードル」」などとあって、こゝは「が」と解してよからう。

0309 「鴨」挨非羅(あひる) A..アヒル B..アヒル

音注「非」字は/ヒ/に対応する例がほとんどであるが、0191「屁 非夫羅」(へふる)、0548「公堂上去 子字非雅一過」(つうずへやく)のように、一部に/へ/と解されるものもある。『長崎県方言辞典』に「あへつ あひる。家鴨。五島―三井楽」とある点が注意されるが、とりあえず「あひる」と解しておく。『唐話纂要』「鴨ヤウル児 アヒル」『南山考講

記「鴨子^{ヤツ} アヒル 家鴨^{キヤヤ} アヒル」。

0310 「鶏」 妥里 (とり) A…トリ B…トリ

0311 「龍」 太子 (たつ) A…タツ B…タツ

0312 「魚」 游河 (いお) A…ユオ B…ユオ

校本A Bともにユオと読み、校本B索引の見出しに

「ゆを「魚」△いを」ノ訛転」

の注がある。音注「游」字は他に例はないが、同じ流摂三等の「由」「油」「有」「又」等の例からすれば、たしかに／ユ／を写すにふさわしい字ではある。0012「露 姿由」(つゆ)、0466「湯 由」(ゆ)、0457「醬油 酥油」(しょうゆ)、0272「婁子 太有／受六施(たゆう／じよろし)」、0776「教 烏酥有」(おそゆる)、0016「雪 又其」(ゆき)、0411「百合 又里」(ゆり)等々。

ただし、ラングとして「ゆお」の語形が肥前方言に存したかどうか。『長崎方言集』に「イヲ」「イランマチ」「イランタナ」「イランメンタマ」等の項が見え、『長崎県方言辞典』が「長崎県の大部分が、魚類一般の総称をイオという。若い世代はサカナを併用、サカナを標準的だとする」と記すように、現代肥前方言形が／イオ／であることを思えば、長崎の口語の世界ではこの語の1音節目は古今を通じて／イ／であったと考えるのが穏当であろう。事実、長崎関係の古文獻には「いを」の仮名書き例が見え、『瑞日語彙』『日本語文典例証』『長崎方言慣用覚書』等の長崎関係外国資料も [wo, iwo]といった表記をとるのだが、「ゆお」の例は未だ見ないのである(「うお」の仮名書き例もあるが、これは文語あるいは中央語を介しての doublet であろう)。

ところで、現代肥前方言にその傾向が看取されることから予想されるように、近世長崎方言の／オ／は、語中、ことに狭母音の後においては唇音性を帯びていたものと思われる。その唇音性のゆえに、それに前接する／イ／が音声的に／ユ／のそれに近づくのであって、この音注は、そのような音声形をとらえたものと解せよう(イウオ↓イウーオ)。

0313 「魚骨」 烘尼 (ほね) A…ホネ B…ホネ 《駒上…骨ナシ》

音注「烘」字は他に例がないが、東韻曉母の字であり、／ホ／と解してよかろう。

0314 「魚翅」 非力 (ひれ) A…【この項誤脱】 B…ヒレ

見出し語は料理に使う「ふかのひれ」。『南山俗語考』「魚翅イッコウ フカノヒレ」、『崎港聞見録』「鯊魚翅サアイユイスウ フカノヒレ」等。
 0315 「魚膠」莪皮(【莪↓義】にべ) A:● B:●

見出し語は魚の浮袋で製した膠の意。『訳官雑字簿』「魚膠 ニべ」、『訳家必備』「魚膠」。音注「莪」字は他に例がないが、同音の「哦」字は0137「身體 哦太」(ごたい)、0273「好婊子 式馬拔拉哦受」(しまばらごじよ)、0340「大花蛤 法麦哦里」(はまぐり)、0628「理梳具 平哦里」(びんぐり)のように／ゴ／か／グ／を写すのに用いられている。おそらくは「義」字の誤りであろう。0687「起貨 義亞戈」(にやく)、1001「假 義失」(にせ)等。

0316 「魚子」覓拉四覓(【覓↓?】からすみ) A:● B:●

見出し語は魚の腹子の意。音注「覓」字は0025「壬 覓子拿一」(みずのえ)、0040「南 覓那迷」(みなみ)、0112「路 覓止」(みち)、0361「雌 覓」(め)、0801「総結 式覓的」(しめて)のように／ミ／か／メ／を写すのに用いられる字。ここは1字目の「覓」字を誤写とみて「からすみ(唐墨)」と解してよからう。『重訂本草綱目啓蒙』「魚子 魚子食用するもの数多し、カラスミは赤目烏の子なり、胞を重ねて鹽乾す。肥前野母(のもの)の産を上とす。」、『南山考講記』「蠟子ラツウ カラスミ」。なお、0612「銅壺 葯覓」の項に関する校本B覚え書きに

「音注「葯覓」の「覓」について、簡要531の音注には「藥寬」とあって、「寬」である。「覓」は「寬」の字形相似による誤写と見て「ヤクワン」。」

とある。ここも「寬」字を想定するのがいいかもしれない。

0317 「小魚」由滑施(いわし) A:ユワシ、鰯 B:ユワシ

0312 「魚 游河」(いお)と同じ理由で「いわし」と解しておく。『唐話纂要』「鯧魚ウランイユイ イワシ」、『崎港聞見録』「鯧子 イワシ」。ただし、ここは「ゆわし」の可能性がなくもない。『長崎県方言辞典』「ゆわし いわし。鰯。長崎市(稀)」。

0318 「鮮魚」薄之奴由河(【之↓?】ぶえんのいお?) A:● B:ハツノユオ
 校本B覚え書きに

「音注「薄之奴由河」(簡要249「薄之奴游河」)は「ハツノユオ(初の魚)か。」

とある。しかし音注「薄」字は過韻並母字で／ハ／にはふさわしくなく、0161「伸腰 奴薄(のぶ)、0172「伸脚 下式 奴薄」(あしのぶ)、0469「茯苓 薄古流」(ぶくりゆう)等のように／ブ／にあたる例がある。『長崎方言集覧』に「ブエ

ン 無鹽。鹽を施さない魚。、『長崎方言集』に「ブエン 無塩」、『長崎県方言辞典』に「ぶえん 無塩の意。生魚。鮮魚。対馬(新)。対馬南部。五島。五島―小値賀・若松・三井楽。北松浦―鹿町・吉井・佐々・小佐々。大村市西大村。諫早市。島原半島大部分。ブイエン 老岐。ビエン 西彼杵―野母崎。」などとあるところからすると、音注「之」を改訂する必要があるが、「無塩の魚」に該当すると見てよからう。なお、音注の「由河」については0329「鍋蓋魚 燕皮由河」および0312「魚 游河」の項参照。

0319 「黒魚」空婆由河(こぶいお) A…● B…●ユオ

見出し語はウナギまたはイカの異称。校本B覚え書きに

「音注「空婆由河」(簡要250「空婆游河」)は「コンボユオ」で「黒ん坊魚」の訛音か。」

とあるが、ウナギまたはイカにあたる「黒ん坊魚」なる語の存在を確かめることができない。静岡県榛原郡にウナギの子の意の「こんぼ」があるが、肥前あたりには見当たらないようである。『南山考講記』の「墨魚 コブイカ」のような例もあるが、これも決定的ではない。

0320 「鯽魚」福那(ふな) A…フナ B…フナ

見出し語はフナ。『南山俗語考』「鯽魚^{ツイイ} フナ」等。

0321 「金鯽魚」金翅(きんぎよ) A…● B…キンギョ?

音注「翅」字は本項と次項の2例のみだが、眞韻書母の字で／ギョ／には不適である。

0322 「銀魚」杏翅(ぎんぎよ) A…● B…ギンギョ?

見出し語は金魚の一種。『南山俗語考』「銀魚^{シライ} シラウオ」。また、『崎陽群談』には福建省漳州の土産に「銀魚」と見えている。音注「杏」字は他に例がなく、梗韻匣母字で／ギン／には必ずしも適当ではない。

0323 「帶魚」搭子由河(たちいお) A…タツユオ B…タツユオ 《駒・由田「一本田作由」》

見出し語は太刀魚の意。『八僊卓燕式記』「帶魚糟 此方ノタチノウヲノ糟漬ナリ」。但し音注「子」字は／チ／には相応しくないかもしれない。0047「元旦 環日子」(ぐわんじつ)の項参照。

0324 「甲魚」茄迷(かめ) A…カメ B…カメ

0325 「庖魚」挨河皮(あおび) A…アオビ B…アワビ

見出しの「庖魚」は不審だが、音注から見て「鮑魚」と見てよからう。『唐話纂要』「鮑魚 アハビ」、『南山俗語考』「鮑魚 アハビ」。但し、音注「河」字は0312「魚 游河」(いお)、0326「蔓子魚 蔓子河」(かつお)、0954「上 河」(うえ)、0965「裡 河拉」(うら)のように、/オ/または/ウ/に相応しい字である。『日葡辞書』には「下(x)の語」として「Auobiアロビ(鮑)鮑、貝類」があり、『崎港聞見録』にも「鮑魚乾 ホシアヲヒ」のような例がある。『長崎県方言辞典』「あおび あわび。鮑。長崎市。西彼杵―野母崎。アオビゲエ 鮑貝の意。あわび。鮑。長崎市。」。こは「あおび」と解されよう。

0326 「蔓子魚」蔓子河(かつお) A…カツオ B…カツオ

見出し語は日本語「カツオ」(鯉)の音訳語。『南山考講記』に「蔓子魚 カツヲ又カツヲフシ 長崎ハタリノ唐人ノ云フトコロ」とあつて、長崎渡りの中国商人の間で通用していたものようである。

0327 「比目魚」客利由河(かりいお?) A…カリユオ B…カリユオ

見出し語はカレイ・ヒラメの意。『唐話纂要』「鰈魚 カレイ 一名比目魚」、『南山俗語考』「比目魚 カレヒ」。福岡・熊本に「カリー」、鹿児島に「カリンイオ」の語形があり、『長崎県方言辞典』には「かりわ かれい。鰈。島原市家中・鉄砲町」の記述が見える。確例はないが、ここはとりあえず「かりいお」と解しておく。

0328 「金線魚」一篤郁李(いとより) A…● B…イトヨリ 《駒上…郁》那》

校本B覚え書きに

「イトヨリ(糸搓り)」は硬骨魚目たい科の魚の名。」

とある。『南山俗語考』「金線魚 イトヨリ」。

0329 「鍋蓋魚」燕皮由河(皮↓?) えいのいお A…エビユオ B…エビユオ

見出し語はエイの意。『南山考講記』「鍋蓋魚 エイノウヲ」、『長崎方言集』「エーノイヲ 鱧」、『長崎県方言辞典』「えいのいお あかえい。赤鱧。菱形の平たい魚、尖った尾には有毒な刺があり、南日本沿海の産、食用にする。西彼杵―野崎。エエノイヲ 長崎市」等の記述から「えいのいお」と解されよう。音注「皮」字は、「那」「奴」あたりの誤写であろう。

なお、本項のような「魚」に対する「由河」の音注が他に5例あり、校本ABともにすべて「ユオ」とする。音

注「由」字はたしかに／ユ／を写すにふさわしい字であるが(0012「露 姿由」(つゆ)、0466「湯 由」(ゆ)等々)、古文献の表記や現代の方言形からみて「いお」と解しておく。0312「魚 游河」(いお)の項参照。

0330 「馬交魚」 雙拉式由 (■) A・・● B・・ソラシユオ？
河

見出し語は未詳。『唐話纂要』「馬 鮫^{マア、キャウ} サハラ」、『南山俗語考』「馬 鮫^{マア、キャウ} サハラ」と同じであれば「サワラ」。音注の「雙拉」がそれに該当するかもしれないが、残りが解釈できない。校本B覚え書きには
「音注「雙拉式由河」(簡要260「双拉式游河」)は「ソラシユオ(反し魚)」か。」
とあるが、「反し魚」の確例を見ない。未考。

0331 「鯨魚乾」司助米(助↓肋)するめ) A・・スス(ル?)メ B・・スルメ
校本B覚え書きに

「音注「司助米」は「スルメ」の訛語「スジユメ」か。」
とあるが、恣意的な訛語の想定には問題がある。0027「子 田士米」参照。音注「助」字は他に例を見ない。ここは来母の「肋」字の誤りかとも思うが、「肋」字も他に例がない。

0332 「蝦」一別(えび) A・・イビ B・・イビ

校本A・Bともに右のように仮名を振り、校本B索引部には
「いび「蝦」(えび)ノ訛転」

と注記があるが、肥前では古今をつうじて／エビ／であったと思われる(『日葡辞書』「Yebigani. エビガニ(蝦蟹)伊勢海老、または、車海老。下(x)の語。」「本草綱目啓蒙」「伊勢えび えびがね 長崎」、『長崎方言集』「エビガネ 海老」「スエビ 小えび」etc.)。古文献に「いび」の仮名書き例でも散見されない限りは、これを先ず／エ／と認め、しかるのちに(今日の肥前方言がそうであるように)その口蓋性をここに読み取るべきであろう。0009「風」参照。

0333 「小蝦」司一別(すえび) A・・スイビ B・・スイビ

『長崎方言集』に「スエビ 小えび」とある。前項および0009「風」参照。

0334 「龍蝦」一別茄尼(えびがね) A・・イビガニ B・・イビガニ

見出し語は大海老・伊勢海老。『日葡辞書』に「Yebigani.エビガニ(鰕蟹)伊勢海老、または、車海老。下(x)の語。」とあるが、音注「尼」字は／ニ／／ネ／の両方の可能性があり、ここは「えびがね」であろう。『重訂本草綱目啓蒙』「伊勢えび ゑびがね 長崎」、「長崎方言集」「エビガネ 海老」、「長崎県方言辞典」「えびがね えび。伊勢えび。大村市。長崎市。西彼杵―伊王島・野母崎。」等。

0335 「蟹」茄覓其(■) A…● B…カメキ?

見出し語は「蟹」に同じ。肥前方言では「がに」「がね」「がん」「がんじい」といった語形が期待されるが、いずれもすつきりしない。おそらくは次項の音注がからんで誤写が生じたのであろう。『長崎県方言辞典』「がに かに。蟹。対馬南部(田舎語)。杵岐(農村地方)。杵岐―勝本。松浦市星鹿。」「がね かに。蟹。(地点省略、広範囲)」「がん かに。蟹。杵岐。五島。五島―宇久・岐宿・三井楽。」「がんじい かに。蟹。北松浦郡へ全方。西彼杵―外海神の浦(ガネ併)。

0336 「蟹」茄覓(がめ) A…カメ B…カメ

見出し語は「蟹」に同じで、すつぽん。『筑紫方言』に「^{すつぽん}蟹 がめ」、「重訂本草綱目啓蒙」に「蟹 ガメ 肥前 筑前 能州 …」などとある。現代では亀一般に用いるようである。『長崎方言集』「がめ かめ」、「長崎県方言辞典」「がめ 亀。佐世保市杵岐。長崎市。南高来―深江・有家。」等。

0337 「海鰻」烏乃其(うなぎ) A…ウナギ B…ウナギ

0338 「溪鰻」烏搭其(【搭↓捺】うなぎ) A…● B…【搭↓捺】ウナギ 《駒上…搭↓拉》

校本B覚え書きに

「駒本、音注「烏搭其」の「搭」を「拉」に作る。「搭」も「拉」も「捺」の字形相似による誤写とも考えられるし、また、底・駒本それぞれ原文のまままで解すると「ウタギ」「ウラギ」となり、いずれも「ウナギ」の訛音と見得る。」とある。誤写については従うべきであろう。ただし訛語については0227「子 田土米」、祖本については0330「卯 土迷 迷」を参照。なお、前項ともども「うなぎ」と解したが、音注「烏」字は／ウ／／オ／に通用されており、「おなぎ」の可能性もある。『長崎県方言辞典』「おなぎ うなぎ。鰻。長崎市(稀)。西彼杵―野母崎。島原半島大部分。オナグ 南高来―深江・西有家・北有馬・南有馬。オナク 島原市杉谷。オナン 五島―上五島。」

0339 「小蛤」羊加麦施(■) A…● B…ヨカムシ

音注「羊」字は他には0334「未 羊其」(やぎ)、0741「厭 羊街馬施」(やかまし)の2例があるのみ。音注どおりに読めば「ヤカマシ」といったところか。未考。

0340 「大花蛤」法麦哦里 (はまぐり) A…ハマグリ B…ハマグリ

0341 「海蟹」可拉其 (くらげ) A…クラギ B…クラゲ
見出し語は意味不明。おそらくは「海蟹」か「海蜇」の誤りであろう。ともに「くらげ」の意。『南山俗語考』「海蜇」ク
ラゲ。

0342 「海参」一カ古 (いりこ) A…イリコ、乾したなまこ B…イリコ
『唐話纂要』「海参」イリコ等。

0343 「活海参」拖白拉古 (【白↓?】とらご) A…トハラコ、俵子、生のなまこ B…トハラコ

『日葡辞書』「Tauragoタワラゴ(俵子)またはNamacoナマコ(生海鼠)。日本で食用にされるなまこ。」「南山俗語考」「海参」イリコ 海鼠 ナマコ 鮮海参 同上、『長崎歳時記』「我邑の貴賤なまこをさし、多くたわら子といふ」等々から「たわらご」が期待されるところだが、音注「白」字は0242「兄 白布山」(ばぼうさん)、0467「烟 太白戈」(たばこ)のように／＼にあたり、音注「拖」字は0029「寅 拖辣」(とら)、0036「酉 拖里」(とり)のように／＼が一般的。『長崎古今集覧名勝図絵』「俵子」、『筑紫方言』「俵 たうら」、『長崎県方言辞典』「とら たわら。俵の音変化。(地点省略、広範囲)」「とらご」なまこ。海鼠。「長崎の冬には朝、物売りたちが俵子(とらご)を売りに来る。俵子とは海鼠(なまこ)だ。」へ女の一生「長崎市。西彼杵―野母崎。」「とらごもち 大きな海鼠形に伸した餅。薄く切つて、へぎ餅にしたりなどする。長崎市。」などからすると、「とらご」の方が音注「拖」字にはあう。いずれにしても音注「白」字は何等かの改訂が必要となる。なお、校本Bはトハラコ(索引部では「たはらこ」[俵子]とする)と読むが、音注に仮名遣が反映することは普通ありえない。

0344 「海鮫」月酥 (えそ) A…エソ B…エソ

『大漢和』「鮫」字の項「はえ。はや。」「南山俗語考」「鮫魚」ゴチ「鱈魚」エソ等々の記述がどのように結びつくのか、未考。

0345 「虎」吐拉 (とら) A…トラ B…トラ

- 0346 「獅」式式(しし) A…シシ B…シシ
 0347 「象」俗(ぞう) A…ゾウ B…ゾウ
 0348 「象牙」俗及(ぞうげ) A…ゾウゲ B…ゾウゲ
 0349 「鹿」客奴司司(かのしし) A…カノシシ B…カノシシ
 『長崎県方言辞典』「かのしし 鹿。対馬―峰。長崎市。」等。
 0350 「馬」咩馬(んま) A…ウマ B…ウマ

音注「咩」字は同意・許可をあらわす感嘆詞で、日本語の「ん」「んー」に近い。ここ以外では0373「梅 咩梅」、0438「飯 咩米食」の2例があり、3例ともにマ行音に前接している。おそらくは「んま、んめ、んめし」のような形を写したものであろう。

- 0351 「狐狸」去去你(【去去↓去?】きつね) A…【去去↓吉子?】キツネ B…キチュネ
 校本B覚え書きに

「校本、音注「去去你」の上二字を「吉子」と校されるが、本書は原文のままにて「キツネ」の訛語「チュチュネ」と見る。」

とある。0027「子 田士米」参照。

- 0352 「猪」以几母搭(■) A…イキムタ、生豚? B…イキムタ
 「イキムタ」や「イキブタ」の確例が見つからない。未考。
 0353 「肉」蒲達(ぶた) A…ブタ、豚の腿肉の燻製 B…ブタ
 0354 「羊」雅几(やぎ) A…ヤギ B…ヤギ
 0355 「猫」蟻戈(ねこ) A…ニコ B…ネコ
 0356 「犬」因戈(■) A…イン(ノ)コ B…インコ
 尼去木(■) A…【木↓米】ネチュミ B…【同】ネチュミ
 0357 「鼠」田士米(ねずみ) A…【田↓尼】ネズミ B…デズミ

校本B覚え書きに

「校本、音注「田士米」の「田」を「尼」に校されるが、本書は原文のままにて「デズミ」↓27。」とある。0027「子 田士米」参照。

0358 「牛角」受措戈(【受↓?】ぎゅうかく) A:● B:ギウカク

『日葡辞書』「Guñcacu.ギウウカク(牛角) Vxino tguno. (牛の角) 牛の角。」

0359 「犀角」白子收奴(■) A:● B:●ツノ 《駒上:白血?》

0360 「皮」措華(かわ) A:カワ B:カワ

0361 「雌」覓(め) A:メ B:メ

0362 「雄」沃(お) A:オ B:オ

花木類

0363 「花」花納(はな) A:ハナ B:ハナ

0364 「藥」子箔皮(つぼみ) A:ツボビ B:ツボビ

音注「皮」字はノミノには相応しくないが、「つぼび」の語形の確例がないうちは「つぼみ」としておくのが無難であろう。『南山考講記』「花藥^{ハナジュイ} ツボミ」。

0365 「心」花納奴心(はなのしん) A:ハナノシン B:ハナノシン

『南山考講記』「桂花心^{クイハアスイ} キクノシン」

0366 「蒂」聞(つ?) A:● B:●
見出し語は「へた」。音注「聞」字はこと0169「膝 脚聞(■)のみ。校本B覚え書きに

「蒂」に対する音注「聞」は現代北京音 cha2である。不明。」とある。未考。

0367 「葉」法(は) A:ハ B:ハ

0368 「梗」一達(えだ) A:イダ、枝 B:イダ

0369 「枝」額手 (■) A…● B…エダ

校本B覚え書きに

「枝」に対する音注「額手」の「額」は、現代北京音でㄛであるので「エダ」と解説。368梗 に対する「一達」(イダ)があるので、或いは「イダ」とすべきか。」

とあるが、北京音の援用には問題がある。「手」字をダと解するのも不審。訓読であろうか。「額」字の他例は0308「鵝 額」(が)、1026「灣 麦格六以額」(まがる・いがむ?)のみ。「手」字の他例は0544「會館 那格篩几快手」(長崎会所)、0747「怕羞 木獨法宜手」(ものはじす?)、0783「商議 沙淡手」(そうだんしゅう?)等。未考。

0370 「根」業(ね) A…【葉(駒)↓業】ネ B…ネ 《駒…業↓葉》

0371 「蘭」郎奴(らんの?) A…ラヌ B…ランノ

校本B覚え書きに

「音注「郎奴」、校本は「ラヌ」と訓まれている。本書は「奴」を格助詞の「の」と見て「ランノ」と試読。つまり連体格の中、「体言十の十零」の形と考え、372菊 吉吉へ古↓奴(キクノ)や376牡丹 箔丹奴(ボタンノ)なども同断とす。また、395百合に対する音注「又吉花納奴」は校本により「又里奴花納」の倒錯と見、これに従ったが、或いは原文のままにすべきかも知れぬ。もし、そうならば、やはり「奴」は前記の公式に該当するものである。しかし、387荷花 豁式郎へ那↓花納(簡要387も同文)のごとき例もあるので、一往「ユリノハナ」と訓ずることにした。「日本館訳語」には一例「384進貢 嗑得那(皇帝の)」がある。」とある。

0372 「菊」吉吉奴(きくの?) A…【吉吉↓吉古?】キクノ(ハナ) B…【同】キクノ

0373 「梅」呬梅(んめ) A…ウメ B…ウメ

0350 「馬」呬馬(んま) 参照。

0374 「桃」木木(もも) A…モモ B…モモ

0375 「桂」木古式(もくせい) A…モクセ、木犀 B…モクセ

『下学集』「木犀 モクセイ 桂也」、「南山考講記」「桂花^{クイダ} モクセイ」。

0376 「牡丹」箔丹奴（ぼたんの？） A…ボタヌ B…ボタンノ

0377 「山茶」之拔其（つばき） A…ツバキ B…ツバキ

0378 「海棠」收該多（しゅうかいどう） A…シユウカイドウ、秋海棠 B…シユウカイドウ

この音注は0404「秋海棠 收該多」（しゅうかいどう）とまったく同じ。

0379 「杜鵑」沙之其（さつき） A…サツキ B…サツキ

0380 「石榴」着六戈（六戈↓戈六）じゃくろ A…【六戈↓戈六】ジャクロ B…【同】ジャクロ

『南山考講記』「柘榴花^{ジリウハ} ザクロ」。音注「着」字は、他には0669「麝香 着谷」（じゃこう）のみ。『長崎県方言辞典』に「じゃくろ ざくろ。榴。ジャークロ。」とあるので、「じゃくろ」と解しておく。

0381 「芍薬」利戈約戈（しゃくやく） A…サク？ B…サクヤク 《駒…利…剣、駒上…約…納》

音注「利」字は0382「櫻桃 利古拉」（さくら）、0412「草 可利」（くさ）、0528「魚白 下利其」（あさぎ）のように／サ／に相応しいが、ここはとりあえず「しゃくやく」と解しておく。『南山考講記』「芍薬花^{シャクヤク} シャクヤク」等参照。

0382 「櫻桃」利古拉（さくら） A…サクラ B…サクラ

0383 「芙蓉」付五（五↓？）ふよう A…【五↓右？由？】フヨウ B…フヨウ

0384 「梔子」闊子那式（くちなし） A…● B…クチナシ

見出し語はくちなし。『南山考講記』「山梔花^{サンシウハ} クチナシ」。音注「子」字については0047「元旦 環日子」（ぐわんじつ）の項参照。

0385 「雞冠」吉于多石（けいとう？） A…● B…ケイトウ？

見出し語はケイトウ（鶏頭）の意。『唐話纂要』「雞冠^{キイクン} ケイトウ」。校本Aは未考、校本Bは右のように仮名を振り、覚え書きに

「音注「吉于多石」を「吉石多于」の倒錯と見て「ケイトウ」と試読。簡要386。」

とする（「石」字を訓読か）。「于」字を無理に／ウ／に引き当てずとも、「吉于多」で「ケイトウ」と読めそうである（「于」字については0003「日 烏非／倭子山馬」参照）。しかし「石」字が余る。『明安調方記』に見える「鶏頭実（けいとうしつ）」と関係があるか。未考。

0386 「山丹」非又力(ひゆり) A…ヒユリ、緋百合 B…ヒユリ

0387 「荷花」豁式郎花納(はすのはな) A…【郎↓那】ハシノハナ B…【同】ハシノハナ

音注「式」字はシ／セ／に相応しいが、0468「葯 苦式立」(くすり)のような例もあるので、とりあえず「はすのはな」と解しておく。音注「郎」字はノ／にあたるか。0151「小心 哭哭奴福司／該」(こころほそか?)の項参照。

0388 「茉莉」古戈利吉(■) A…● B…マツリキ 《駒上…梨…莉》

校本B覚え書きに

「音注「古戈利吉」は、祖本に片仮名による傍訓「マツリキ」とあったのを、字形相似によってかく誤写せるものか。簡要388の見出し語も「茉莉」。

とある。片仮名傍訓付き祖本の恣意的な想定については0030「卯 士迷迷」参照。未考。

0389 「棟棠」下馬(■) A…ヤマ(ブキ)、山吹 B…ヤマぶき

見出し語はヤマブキの意。『南山考講記』「棟棠 ヤマブキ」等。音注「下」字は、他に0172「伸脚 下式奴薄」(あしのぶ)、0275「乞丐 下毛婆式同」(やまぶしどん)、0528「魚白 下利其」(あさぎ)、0631「剔牙簽 芝麻下士」(つまようじ?)等がある。「下馬」で「やま」と解せそうだが、以下を脱している。

0390 「薔薇」束皮(しょうび) A…シヨビ B…シヨビ

0391 「玉簪」闕(■) A…● B…●

見出し語はギボウシ。『唐話纂要』「玉簪 キボウシ」等。音注に脱落があろう。

0392 「鳳仙」之麦你(つまね) A…チマニ、爪根(つまね)は爪、この花と酢漿草とをもみ合わせて爪を染めるよりいうと B…チマニ

校本Bは「つまね」ノ訛転カ」と注して右のように解するが、素直に「つまね」と読んでよからう。0377「山茶 之拔其」(つばき)、0569「索 之納」(つな)、0154「胸 木你」(むね)等々。『壺蘆圃雜記』「鳳仙花を つまね」、『唐話纂要』「鳳仙 ツマネ」、「重訂本草綱目啓蒙」「つまね 肥前」。

0393 「水仙」亜沃子(■) A…● B…アオイ?

校本B覚え書きに

「水仙」の音注「亜沃子」を少し無理はあるが「アオイ」と試読。400錦葵 哭阿沃一（コアオイ）がある。「イ」を「子」と誤記せる例→476 652 655 667。」

とある。たとえば『唐話纂要』には「葵花クイハア アフヒ」と「水仙スイセン スイセン」が見え、両者の同定は難しそうだが。

0394 「嬰粟」吉式（けし） A…ケシ B…ケシ

0395 「百合」又吉花納奴（■） A…【又里奴花納】ユリノハナ B…ユリノハナ

0396 「洛陽」大者吉之古（せきちく？） A…トセキチク、唐石竹 B…トセキチク

見出し語は瞿麦（ナデシコ）の異名。『和漢三才図会』九四末「石竹二種単弁者名石竹、千弁者名洛陽花」、『唐話纂要』「石竹シチヨ ナデシコ」、『南山考講記』「石竹花シチヨハア セキチク 洛陽花ロヤンハア 同上」などで洛陽と「せきちく」はつながる。音注「大」字は／ト／／トー／には不適。「者」字も他に例がない。「大者」が音注という確信もないので、ここでは「せきちく」とどめておく。

0397 「紫藤」付加奴（■） A…【加↓石】フジノ（ハナ） B…【同】フジノ

『南山考講記』「紫藤花ツウテンハア フヂノハナ」等。

0398 「綉球」帖馬（てまる） A…テマ（リ） B…テマリ 《駒上…球》瑠》

見出し語は「繡毬」に同じで、紫陽花（あじさい）に似た花をつける「てまり花」。『唐話纂要』に「綉毬スイウギウ テマリ 一 名粉團ツウヤン 紫陽 アヂサイ」とあり、『南山考講記』に「綉毬花シウギウハア アツサエ」とある。『長崎方言集覧』「テマル 手球。てまり」「テマルクワ 手球花。てまり花」。音注が最終音節を脱しているように見えるのはr化を反映したものであるろう。

0399 「瑞香」林竹（りんちやう） A…● B…ヂンチャウ？

見出し語は沈丁花のことであるが、これにはまた輪丁花の異名がある。『大和本草』「瑞香 国俗沈丁花と云をあやまりて、りんちやうと云」、『崎港聞見録』「瑞香スイヘヤン リンチャウ」。音注「竹」字は他に0668「丁香 竹仁」（ちやうじ）の例がある。『唐話纂要』「淡竹タンチヨ、苦竹ククチヨ、石竹シチヨ」。

0400 「錦葵」哭阿沃一（こあおい） A…コアオイ、小葵 B…コアオイ 《駒上…一ナシ》

『南山考講記』「錦葵花キンクイハア 小アライ」

0401 「六月雪」幔点式（まんでんせい） A…● B…ナデシコ

校本B覚え書きに

「音注「幔点式」を「ナデシコ」、402の音注「荅迭式戈」も「ナデシコ」と解説。ともに「ナデシコ」の訛語として「マデシコ」「タデシコ」とも解し得るし、また、401は祖本の傍訓を「ナデシコ」と字形相似による誤写、402は「タデシコ」とやはり字形相似による誤写とも考えられる。もし後者に解する場合には388の誤写の事情とも関係して行くかも知れない。」

とある。訛語については0027「子 田士米」、祖本については0030「卯 士迷迷」参照。校本Bは「なでしこ」に比定しようとするが、見出し語は白丁花の異名。『大和本草』「白丁花」の項に「筑紫にてぼんていしと云。漢名しれず。」「大和本草批正」に「はんていしは満天星の転なり。」「大和本草付録批正」に「六月白花を開く。漢名六月雪花鏡 満天星 肇慶府志」、『南山考講記』「満天星 小ギク」とある。音注「幔点式」は右に言う「満天星」であろう。「星」が呉音訓みか漢音訓みかは／＼の口蓋性の問題も絡んでにわかには判断し難いが。

0402「剪春羅」荅迭式戈【荅↓捺?】なでしこ A…● B…ナデシコ

見出し語はまつもと。ナデシコ科の多年草で九州に自生する。校本B覚え書きは「タデシコ」の訛語を想定する(前項参照)が、確証がない。

0403「剪秋羅」掩皮(がんび) A…ガンビ、岩菲 B…ガンビ

見出し語は別名岩菲。『日葡辞書』「Gampi」、『南山考講記』「剪羅花 チエンロウハ ガンヒ」。

0404「秋海棠」收該多(しゅうかいどう) A…シユウカイドウ B…シユウカイドウ

0405「虞美人」別人迷【迷↓速】びじんそう A…【迷↓速】ビジンソウ B…【同】ビジンソウ
音注「迷」字については0004「日晒 忽迷」【迷↓速?】ほす参照。

0406「菓子」卦司(くわし) A…カシ B…カシ

0407「梨」乃式(なし) A…ナシ B…ナシ

0408「柿」措其(かき) A…カキ B…カキ

0409「橘」蜜甘(みかん) A…ミカン B…ミカン

0410「桃子」木木司其(もも) A…● B…もも●?

音注「司」字は、「那」あたりの誤写か。

0411「百合」又里(ゆり) A…ユリ B…ユリ

0412「草」可利(くさ) A…クサ B…クサ 《駒上…利…利》

0413「菖蒲」式蒲(しょうぶ) A…セ(ウ)ブ B…セウブ

0414「芭蕉」百雀一(■) A…バシヤイ B…バシヤイ

音注「雀」字は精母字で諸方言破擦音。

0415「美人蕉」該右拔(■) A…● B…●バ?

0416「木」几古(■) A…キ、コ B…キコ

0417「紫檀」式檀(したん) A…シタン B…シタン

0418「烏木」酥薄古(■すぼく?) A…● B…スハウ?

校本B覚え書きに

「烏木」の音注「酥薄古」(簡要42も同文)の「古」は、祖本に「ウ」とあったのを字形相似によって誤写したものと考え、「スハウ」と試読→388 401 402 430。419蘇木は音注「酥烏(スオ)」である。隣接せる同一語をかく二様に表記せる事情は、祖本(出典という意味での)違いに由来するものであろうか。368と369の間にも同じ事情があるかも知れぬ。」

とある。恣意的な祖本の設定もさることながら、烏木(コクタン)と蘇木(スオウ)という別ものをはじめから同じとして考えるのは問題があろう。

0419「蘇木」酥烏(すおう) A…スオ、蘇枋 B…スオ

0420「竹」太吉(たけ) A…タケ B…タキ

0421「竹管」可搭几(こだけ) A…コダキ B…コダキ

0422「筍」太吉奴吉(【奴吉↓奴古】たけのこ) A…【奴吉↓奴古】タケノコ B…タキノコ